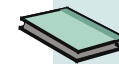


この本と私



「雨の日も、晴れ男」 水野 敬也 著



文藝春秋

主人公はアレックス。ロンドンに住み、こけしなど日本の雑貨を扱う会社のサラリーマンです。二人の小さな神様から悪戯いたずらをされて「不幸」がドツと押し寄せてくる日々を迎えます。朝寝坊をする、当然遅刻。上司から文句を言われる、助けを出す友もいるが別の同僚からは文句を言われる。こんな事はほんの入り口で・・・取り返しの付かない仕事のミス、円形脱毛症、そして会社をクビになる。暴力や詐欺に出会い、家は燃え、ひとりぼっちになって、全てを失う。しかし、アレックスは、どんな困難に出会っても、挫けず窮地を脱出しようと考える。愚痴や言い訳を言いそうになっても、最後には関わった人々を助け、楽しませていく。突拍子もない考えや行動の思いつきには、時々反論したくなるのですが、とにかく可笑しく、楽しく、心の奥深くに暖かい物が残ります。数々の「不幸」のオンパレードに、とうとう二人の神様も大神ゼウスを振り切って下界へ舞い降りてきます。それでも不幸は続きません。落ちてくる建築資材から神様達を庇って大怪我をするのですが、死の間際に真相を知らされても怒る事なく、嘆く事もなく残された妻と子の無事を願うばかり。最後まで前向きな生き方のアレックスでした。その時・・・奇跡はやはり起きる事なく・・・不幸なままに新しい次の日がやって来ました。小さな神様の反省には『神は、人を不幸にすることも、幸福にすることも出来ない。ただ出来事を起こすだけ』とあり、全くその通り！と思いました。

聴子